

『おくのほそ道』紀行330年記念特集

芭蕉を今に紡ぐ蚶満寺と今野又左衛門家

江山水陸の風光数を尽して、今象潟に方寸を責く

これは、『おくのほそ道』の象潟の章の書き出しです。松尾芭蕉は1689（元禄2）年6月16日（陽暦8月1日）に象潟を訪れています。象潟は『おくのほそ道』の目的地であり最北の地です。「川や山や海や陸の美しい風景を数限りなく見てきたが、今や象潟へと心がせきたてられる」とあり、歌枕の地・象潟を前に高揚する気持ちがあらわれています。

そして、2泊3日の滞在でさまざまな人と出会い「象潟や雨に西施がねぶの花」をはじめ3句を詠んでいます。

本号では、今年『おくのほそ道』紀行330年を迎えることを機に、象潟滞在中で芭蕉主従が訪れた蚶満寺の40世、現住職の熊谷右忍和尚と芭蕉主従を迎え入れた名主今野又左衛門家の27代目・金道博氏に、永い歴史の中で今も紡ぐ芭蕉への想いを伺いました。

蚶満寺

6月16日、象潟に入った芭蕉主従は、翌17日の夕食後、舟で島々を巡り能因島の後に蚶満寺に舟を寄せています。当時、蚶満寺は十九島の一つで、舟で潟湖を巡る際もルートの中心であったことが境内に遺る舟つなぎ石から分かります。さらに、『おくのほそ道』では、此寺の方丈に座して簾を捲ば風景一眼の中に尽て、南に鳥海、天をさくえくとあるとおり、蚶満寺は潟湖と鳥海山を望む風景の要でありました。

そして、芭蕉は2泊3日の象潟滞在中に次の3句を詠んでいることが「象潟自詠懷紙」などから分かっています。

①きさかたの雨や西施がねぶの花
②ゆふ晴や桜に涼む波の華
③腰長や鶴脛ぬれて海涼し

しかし、旅の5年後に完成した『おくのほそ道』では、②「ゆふ晴や」が外され、①が「象潟や雨に西施がねぶの花」、③が「汐越や鶴はぎぬれて海涼し」と推敲され2句が収められています。

この、芭蕉が当時に現地で詠んだ句を収めた貴重な「象潟自詠懷紙」は現在も蚶満寺に伝えられ、40世・熊谷右忍和尚が芭蕉の想いとともに今に紡いでいます。

今野又左衛門家

3月27日、江戸深川を発った芭蕉主従は、同年9月6日に大垣から伊勢神宮の遷座式へ出発したところで『おくのほそ道』の旅を終えています。その間、156日。そして、最北の地象潟に入った6月16日は全行程のちょうど半分の78日目になります。

雨のなか、象潟に入った芭蕉主従は、能登屋（佐々木孫左衛門の旅籠）を訪ねています。曾良旅日記に「衣類を借りて濡れた衣を干し、うどんを食べた」とあります。その日は熊野権現の祭礼とかさなり女客で部屋がふさがついていたため、向屋（佐々木左右衛門次郎の旅籠）に泊まっています。

象潟滞在中、芭蕉主従の面倒を見ていたのが町名主の今野又左衛門の実弟・今野嘉兵衛です。前述のとおり、祭礼のため忙しかった又左衛門に代わり名代の嘉兵衛が世話をしていました。又左衛門も17日の夜、芭蕉主従を訪ね歓談しています。

嘉兵衛は後に生家の西側に分家し、「合羽屋」という旅人宿を営み、現在も同地に子孫が住んでいます。又左衛門は後年、今野姓を金とあらため、現在は27代目・金道博氏が跡目を継いでいます。

「徴古象潟」象潟郷土資料館 蔵

